ラオス焼畑山村における家畜飼養拠点としての出作り集落の形成

――ルアンパバーン県ウィエンカム郡サムトン村を事例として――

中　辻　　享
ラムプーン・サイウォンサー
竹　田　晋　也

第Ⅰ章　はじめに
第Ⅱ章　サムトン村の概況
（1）村の概況
（2）サナムの立地と景観的特徴
第Ⅲ章　家畜飼養拠点としてのサナム
（1）サナム設営の目的
（2）飼料としてのキャッサバ
（3）サナムでの家畜の世話
第Ⅳ章　焼畑拠点としてのサナム
第Ⅴ章　考察
第Ⅵ章　おわりに

Ⅰ　はじめに

ラオス人民民主共和国（以下，ラオスと略称）において畜産は重要な産業である。この国では人口の85％が農業に従事しており，農業生産はGDPの47％を占める。そのうち3分の1（GDP全体の16％）は畜産と漁業が占めているのである[1)]。

この畜産を支えるのがラオスの農民である。この国ではいまだ企業的な畜産経営が発達しておらず，畜産品の大部分は農民の副業的な経営により生産されている。例えば，ウシや水牛の生産の94％は5頭以下の飼養規模の農民によってなされているし[2)]，ブタも88％は農民により生産されているという[3)]。多くの農民にとって，水田や焼畑による稲作や換金作物栽培が主な仕事である。しかし，世帯によっては畜産は現金収入の半分もの収入をもたらすほどの重要な仕事なのである[4)]。しかも，国内および周辺国（特に，タイ，ベトナム，中国）の需要は近年急速に増加しており，今後とも高収入が期待できる仕事といえる[5)]。

この中で，ラオス政府は農民の貧困削減策の一環として，畜産業のよりいっそうの振興につとめてきた。特に，ラオス北部は大部分が山地で，広大な草地が存在するため，畜産発展の大きな可能性を秘めているとされる[6)]。それゆえ，国際機関のバックアップによるさまざまなプロジェクトが展開されてきた。

こうしたプロジェクトの指導者はオーストラリアを中心とする獣医学の研究者であり，彼らによりラオスの畜産研究は大きく進展してきた[7)]。彼らによれば，ラオスの畜産振興の第一の障害は家畜伝染病であり，第二のそれは季節的な飼料不足である。ラオスでは現在，国内のいたる地域で家畜伝染病の流行がみられる。その主なものとして，口蹄疫（ウシ，水牛，ヤギ，ブタに感染），ウイルス性出血性敗血症（ウシ，水牛），豚コレラ（ブタ），家禽コレラ（ニワトリ，アヒル），ニューカッスル病（ニワトリ，アヒル）が挙げられる。このうち，口蹄疫以外は家畜の大量死を引き起こす病気であり，農民に与える損害は大きい。それゆえ，多くの農民が流行とともに，家畜飼養への意欲を失ってしまうのである[8)]。

このことから，各プロジェクトは家畜へのワクチン接種の普及につとめている。伝染病の多くはワクチン接種により予防することができる。しかし，実際には普及率はいまだかなり低い。例えば，農民の飼養するブタのうち，豚コレラのワクチン接種がなされているのは10％以下だという[9)]。

また，飼料不足は特にウシや水牛の問題である。植生の乏しい乾季にこれらの家畜の食する草本が著しく減少するのである。この問題を解決するために，各プロジェクトは乾季でも飼料となりうる外来牧草の普及に努めてきた[10)]。

こうした獣医学の研究はラオスの畜産の発展に大きく貢献するものといえる。しかし，これらの研究に大きく欠けている視点がある。それは農民が実際にどのように家畜を飼養しているかという視点である。これらの研究では農民の家畜飼養に関する記載は少なく，しかも大雑把である。これは研究の前提に，後進的な

段階の畜産を近代化しなければならないという考え方があるためだろう。しかし，ラオスの農民も古くから家畜飼養を続けてきた人々である。彼らの実践には現地の事情にあった有益なものも含まれているかもしれない。

また，獣医学では，他の仕事との関わりの中で畜産をとらえるという視点が欠落している。多くの場合，農民は副業の一つとして畜産に従事している。農民にとっては畜産は稲作をはじめとするさまざまな仕事の一つでしかないのである。また，畜産は他の仕事と時間的にも，土地利用の面でも重なり合いつつなされている。この事実は，畜産振興をはかる上でも考慮する必要があろう。ラオスの農民は複合的な生計を好む傾向にあり，一つの仕事に特化しようとする者は少ない。

さらに，農民は決して近代的な畜産を受容するだけの存在ではない。彼ら自身の側にも病気の蔓延や飼料不足といった問題に対処しようとする努力がみられるのである。これに関連して，筆者はルアンパバーン県シェンヌン郡のフアイペーン村を事例として，集落から離れたところに出作り集落を設け，そこを家畜飼養拠点とする村人の事例を明らかにしたことがある。これにより，彼らはブタと家禽の病気や飼料不足の問題を解決しようとしていた[11]。こうした出作り集落はラオスの言葉で「サナム」と呼ばれ，ラオス北部では一般的に見られる。畜産振興をはかる上では，こうした農民自身の努力にも目を向ける必要があるだろう。

本稿はこうした農民自身の家畜飼養の実践とその改善策を明らかにする一環として，さらにサナムに焦点を当てたい。具体的には，ルアンパバーン県ウィエンカム郡サムトン村を事例として，サナムの役割を主に土地利用面から明らかにする。これをシェンヌン郡の事例と比較することで，ラオス北部での家畜飼養の共通性と多様性が見えてくるだろう。

サムトン村での調査は2009年11月20-21日，2012年12月20-22日，2013年２月21-22日，2014年９月21-23日に行った。調査方法としては，村長をはじめ，村人に家畜飼養や飼料についての聞き取り調査を行った。また，2012年12月，2013年２月には村内の全てのサナムをまわり，その位置を GPS 測量した上で，設営世帯を確認した。サナムに村人がいた場合には，その運営方法について聞き取り調査を行った。さらに，ウィエンカム郡農林局の役人に2012年および2013年にサムトン村の畑地を全て測量してもらい，家畜飼養に関する基本的な聞き取りもしてもらった。そのデータも本稿では使用している。

以下では，第Ⅱ章でサムトン村の概況と村内におけるサナムの立地と形態について説明したのち，第Ⅲ章でサナムの家畜飼養の場としての機能について詳述する。さらに，第Ⅳ章で当村のサナムが焼畑経営にも関わるものであることを明らかにする。第Ⅴ章で当村でのサナムの役割とその有効性について考察したのち，第Ⅵ章で結論を述べる。

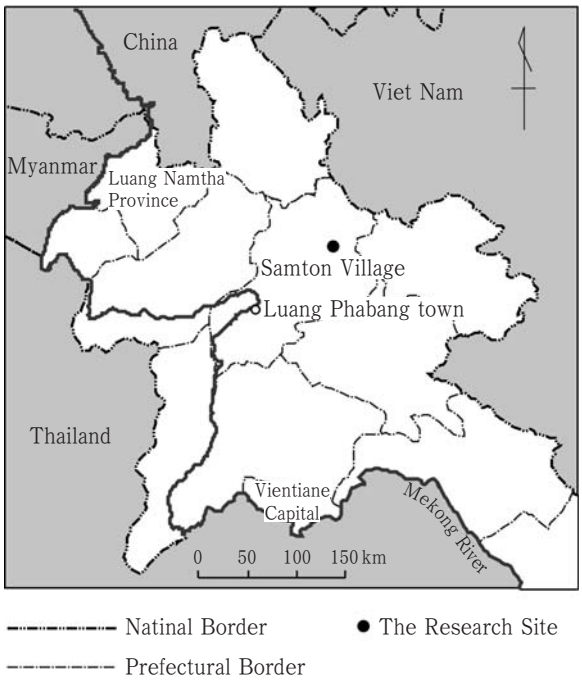
Ⅱ　サムトン村の概況

（１）村の概況

サムトン村はルアンパバーン県ウィエンカム郡に属する。県の中心地であるルアンパバーン市街地から車で4-5時間，郡の中心地であるウィエンカム村からは20分かかる（第１図）。集落は国道１号線の走る尾根上に列村状に展開する（写真１）。この尾根が村の最高所を形成しており，集落の標高は810ｍである。村の領域は主にその北側に展開し，最低所を流れるサニアウ川を挟む南北の山地斜面が村人の主な耕作域である（第２図，後掲第４図）。

当村の成立は1976年であり，1982年までに周辺の５ヵ村の住民が道路沿いのこの地に集住して，村の基礎ができ上がった[12]。2014年９月時点で66世帯412人が居住しており，そのほぼ全てがカム族である。

当村には水田はない。現在も村人の生計において最



第１図　対象地域の位置

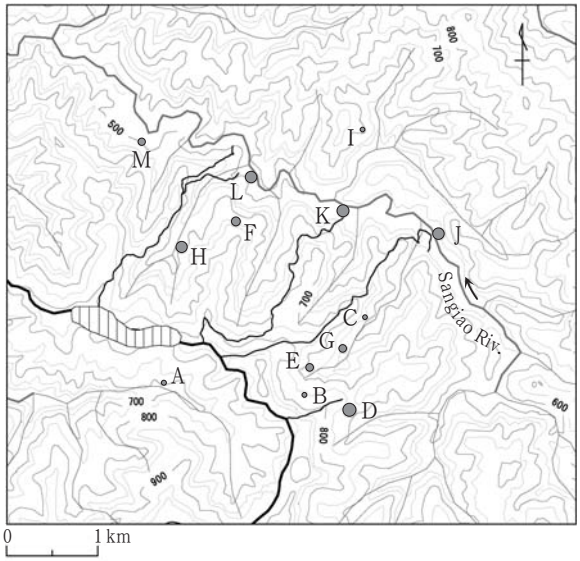
Figure 1. The location of the research site



写真１　サムトン村集落（2012年12月撮影）



写真２　サムトン村の焼畑（2014年９月撮影）
遠景は陸稲の焼畑。焼畑の中に畑小屋も見える。これはキャッサバ畑で撮影したもので手前に写っているのがキャッサバ。



第２図　サムトン村におけるサナムの位置（2012年）

Figure 2. The Locations of *Sanams* in Samton Village (2012)

The location of the village settlement, *sanams* and main and dirt roads were surveyed by the author using GPS in Dec. 2012, Feb. 2013 and Sep. 2014.
The Number of households participating each *sanam* was obtained by interview with villagers.
Made with digital base map obtained at National Geographic Department, Vientiane.

第１表　サムトン村住民の家畜飼養規模（2012年）

Table 1. Domestic animals owned by villagers in Samton Village (2012)

	HHs owning animals		Total No. owned	No. per HH
	No.	%		
cattle	22	34%	52	2.4
water buffalo	22	34%	60	2.7
goat	20	31%	100	5.0
pig	56	88%	267	4.8
poultry	58	91%	831	14.3

Based on the interviews with 64 HHs in the village conducted by the staff of Viengkham District Agriculture and Forestry Office (DAFO) in 2012.

重要の仕事は焼畑稲作であり，2013年には66世帯の住民のうち65世帯が従事していた（写真２）。１世帯あたりの耕作面積は1.7 ha であった。ただし，当村では市場向けのハイブリッド・トウモロコシの栽培が2013年から大規模に展開されている。この耕作面積はトウモロコシ栽培も含むものである。

ちなみに，このトウモロコシ栽培は村人の村内交通に大きな変革をもたらした。これはウィエンカム村の２人の仲買人との契約栽培である。彼らは村人の要望に応えて，2012年12月に集落からサニアウ川に達する数本の尾根上に林道を造成した（第２図）。これに対し，村人は2013年以降，５年間トウモロコシを栽培し，彼らにおさめることで，林道造成費用を返済することになっているのである。2013年２月には66世帯のうち，約20世帯がオートバイを所有していた[13]。オートバイを持つ世帯にとっては，林道造成は焼畑やサナムへのアクセスを大幅に向上せしめたといえる。

こうした耕種農業に加えて，当村では家畜飼養も重要な仕事である。第１表にみるように，ウシ，水牛，ヤギについては３割以上の世帯が，ブタと家禽については９割の世帯が飼養している。村人によると販売向けに特に重要なのはブタとニワトリである。短期間で売りに出せるし，また数も増えやすいためである。ブタは成獣も販売するが，より値段の高い子豚の販売も多い[14]。ニワトリについてはヴェトナム人がやってきて，一度に100羽以上を購入していくという。

（２）サナムの立地と景観的特徴

当村ではサナムを設営する世帯が多く，2012年には66世帯中48世帯（73%）が設営していた[15]。村内に13のサナムが建てられ，１世帯だけのものもあれば，

第２表　サムトン村のサナムの概要（2012年）

Table 2. An outline of *sanams* in Samton Village (2012)

Sanam ID	Altitude (m)	distance from the settlement (km)	No. of HHs	Average distance to the fields of *sanam* members (km)		A/B
				from *sanam* (A)	from village (B)	
A	720	0.9	1	—	—	—
B	720	2.4	1	2.6	0.9	2.71
C	700	2.8	1	0.7	3.5	0.21
D	700	2.9	8	0.9	3.5	0.26
E	670	2.3	3	—	—	—
F	610	1.9	4	1.1	2.1	0.52
G	610	2.7	3	1.1	2.9	0.39
H	590	1.3	6	0.5	1.1	0.46
I	570	3.7	1	0.3	3.9	0.09
J	540	3.9	6	0.7	4.2	0.16
K	520	3.0	6	1.1	2.9	0.37
L	490	2.4	6	0.8	3.1	0.24
M	460	2.2	2	0.9	1.3	0.66
mean	610	2.5	4	0.9	2.7	0.35

Average distances to the fields are calcurated only for 59 fields whose owenrs are specified. As to *Sanam* A and *Sanam* E, I can not specify the fields of *sanam* members.



写真３　サナムＬの遠景（2009年11月撮影）
サニアウ川沿いのサナムである。小さくて見づらいが，ウシ，ブタ，ニワトリが放し飼いされている。

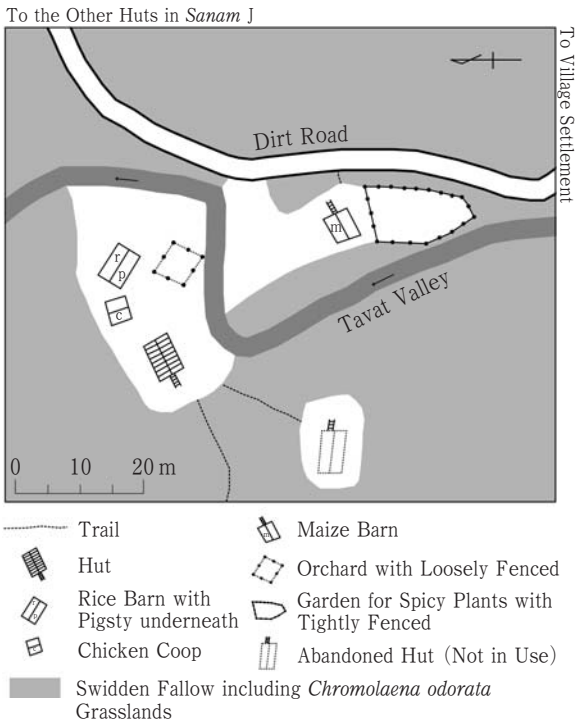
2-8 世帯が共同で営むものもあった。その分布を示したのが第２図である。また，第２表に各サナムの標高，集落からの距離，設営世帯数を示した。これによれば，サナムは集落から直線距離で0.9-3.9 km の範囲にあり，村域内に散在している。標高でいえば，400 m-500 m のサニアウ川沿いから，集落から通いやすい700 m 程度の沢沿いにまで立地していた。設営世帯数との関係でいえば，集落からアクセスのよいサナムほど設営世帯数が少ない傾向が見られる（写真３）。

サナムは全て水場に近接している。水場と小屋を建てるスペースの存在がサナムを建てるにあたって考慮されている。これとともに重要なのが土地利用権である。多くのサナムはそのメンバーの保有地[16]にサナムを建てている。自らが利用権を持たない土地にサナムを建てた場合，その世帯は不安定な立場に立つことになる。いつ立ち退きを迫られるかわからないためである。例えば，サナムＪに関しては，その土地の保有者が2014年に焼畑をする意向を持っていたため，設営世帯は2013年にサニアウ川の対岸にサナムを移さなければならなかった。サナムＡに関しても，村の保全林を一時的に使わしてもらっているということであり，設営世帯はその土地を村にやがては返さなければならないという。

サナムの景観的特徴をつかむために，ここで一つその事例を見ておこう。第３図はサナムＪに属するＶ氏のサナム小屋周辺の概略図であり，2014年９月の状況である。先述したとおり，このサナムは2013年にサニアウ川の左岸にサナムを移動させた。この時，他の設営世帯は以前と同じく，まとまって小屋を建てたのに対し，Ｖ氏は彼らから少し離れたところに小屋を立てた。これは自分の保有地に小屋を建てたかったためである。ここはＶ氏の保有地であるが，他の世帯が小屋を建てている場所はそうではない。この事例からも，自己の権利地にサナムを建てようとする傾向がはっきりと読み取れよう。

Ｖ氏のサナム小屋はタワット沢というサニアウ川に注ぐ沢に沿って建てられている。近くに2012年に建設された林道が走る。Ｖ氏の義理の息子はオートバイに乗って集落とサナムを行き来している。

小屋は 2-3 人が宿泊できるほどの広さであり，調理



第３図　Ｖ氏のサナム小屋周辺略図（2014年）

Figure 3. A Sketch Around Mr. V's Hut in *Sanam* J (2014)
Surveyed by the first author's pacing in Sep. 2014

用の炉が設けられている。さらに，調理器具や食器，寝具，衣類，農具，運搬用の籠類，来年作付けする作物の種子，小動物用の罠，川魚用の漁具などが置かれていた[17]。周辺にはバナナ，パパイヤ，マンゴーなどの果樹園があり，カム族の料理に欠かせない，トウガラシ，ショウガ，レモングラスなどの薬味類を栽培する畑もある。また，米とトウモロコシの蔵がそれぞれ一つずつ設けられている。前者はＶ氏の2014年の焼畑がサニアウ川の対岸へ―つまり，集落とは逆方向へ―40分の場所にあるというから，収穫した米はそこからまずここまで運んでくるのだろう。後者は2013年より大規模栽培がはじめられたハイブリッド・トウモロコシ用の蔵である。さらに，高床式の米蔵の下部は豚舎となっており，隣には鶏舎もある[18]。実際，Ｖ氏はこのサナムでブタ10頭を飼養している。

こうした景観的特徴から，当村のサナムが宿泊を前提に建てられた出作り小屋（数軒が集まっている場合は出作り集落）であることが明らかである。また，それが耕種農業と家畜飼養に深く関わるものであることも明らかである。これは実際村人の意識の上でもそうであり，彼らにサナムとは何かと問えば，焼畑と家畜飼養の拠点という答えが返ってくる。

そこで，以下では第Ⅲ章で家畜飼養の拠点としてのサナムの役割を，第Ⅳ章で焼畑の拠点としてのサナムの役割を詳述することにしたい。

Ⅲ　家畜飼養拠点としてのサナム

（１）サナム設営の目的

当村のサナムはブタ，家禽，ウシ，水牛，ヤギの飼養拠点として，まず機能している。例えばブタについてみると，2013年２月には集落内では１つの豚舎で飼養されているだけであった。他のブタは全てサナムで飼養されていたのである。先に見たとおり，サナムには豚舎や鶏舎が設けられているし，中にはヤギ小屋や水牛の繋留場所が設置されているものもある。

それでは，村人はなぜ家畜をサナムで飼養するのだろうか。実は，当村も村が成立してしばらくは，家畜はウシ，水牛，ブタ，家禽とも全て集落を拠点に飼養していた。村人が初めてサナムを建てたのは1992年のことであり，サニアウ川沿いに３カ所建てられたという。この直接のきっかけは道路沿いでの家畜の放し飼いを禁じた政府の伝達である。村人は全ての家畜を放し飼いで飼っていたが，それでは国道１号線を走る車両の通行の妨げになる。これが政府が集落での放し飼いを禁じた理由である。このため，集落ではウシや水牛は繋ぎ飼い,ブタやニワトリは舎飼いするしかできなくなった[19]。

しかし，村人は家畜の放し飼いを好む。放し飼いの方が管理が楽だし，家畜も健康に育つと考えているためである。ブタの場合，放し飼いをしていると雨期はタケノコ，野生のイモ類，ミミズなどを自分で探して食べる。乾季は沢ガニや小魚などあらゆるものを採餌する。このため，村人の給餌する量は少なくてもすむし，家畜もいろんなものを食べるので栄養バランスの面でもよいと考えている。さらに，家畜は自然に交配してくれるので，その面でも人間が介入する必要がない[20]。

サナムはこうした放し飼いがしやすい場所である。当村のサナムの多くは焼畑に近接するため，農耕期間の雨期はブタを舎飼いにする。2012年の場合，聞き取りをし得た範囲では，サナムＡ，Ｃ，Ｇ，Ｈ，Ｉ，Ｊ，Ｋはこうしたサナムであった。しかし，こうしたサナムでも12月から４月の農閑期にはブタを完全に放し飼いにする。さらに，サナムＢ，Ｌ，Ｍでは一年中放し飼いにするということであった。これらのサナムと近隣の焼畑とは地形的な障壁によって隔てられている。あるいは，近隣の焼畑はブタの入り込めないような隙間のない柵で囲われている。



写真４　放し飼いのブタ（2013年２月撮影）
サナムＦにて。左はサナム小屋で下部は成獣用の豚舎となっている。右は子豚用の豚舎。雨や日差しをよける屋根もついている。

サナムでは，放し飼いのシーズンは昼夜とも放し飼いにしている。この場合，豚舎は給餌の場としての役目を果たす。給餌の際に各世帯は豚舎に自身のブタのみ招き入れる。こうすることで，他世帯のブタに餌を横取りされないようにしているのである。給餌が終わればブタはまた外に出て行く（写真４）。

このように，村人の放し飼いへのこだわりが当村でのサナム設営のきっかけとなったということができる。しかし，1990年代初頭に数世帯がはじめた行動が現在ほとんどの世帯に受け入れられているのは，これだけの要因からではない。さらに重要な要因として，集落では家畜の病気がはやりやすいということがある。

村人によれば，当村で家畜がよく死ぬようになったのは1997年からである。この頃から家畜伝染病がよく流行するようになったと考えられている。特に集落は人や家畜がよく行き来するため，その危険性が高い。2013年の２月の調査時にも，集落でニワトリを飼っていたら全て病死してしまったという事例を聞いた。こうしたことがないよう，病原菌の達しにくい集落から離れた場所で家畜を飼養したのがサナムである。

ただし，サナムも近年はこうした目的が果たせなくなってきている。2011-2012年にはサナムＡ，Ｃ，Ｇ，Ｊ，Ｋで，当村で初めての口蹄疫の流行があり，ヤギやブタの被害が出たという[21]。また，病名はわからないが，2013年にはサナムＤでブタとヤギが，2014年にはサナムＬでブタが壊滅的被害にあったという。

この中で，より奥地にサナムを移動させようという試みも見られる。Ｌ氏は2011年までサナムＫに小屋を建てていた。ところが，ここでブタが口蹄疫にかかり，30頭が死んでしまった。そこで，彼は病気のない地を求めて2012年１月に，サナムＩを建てた[22]。2013年２月には，彼はここでブタ16頭とニワトリ10羽[23]を飼養していた。

実際，人や家畜の行き来が少ない奥地ほど，家畜伝染病の流行が少ないということはいえるかもしれない。サナムＩと同じ程度に奥地といえるサナムＭでも，今まで伝染病が流行したことはないという[24]。

（２）飼料としてのキャッサバ

次に，サナムでの家畜の飼養方法について説明したい。まず，家畜の飼料についてである。当村で特徴的なのは，ブタや家禽の飼料としてキャッサバが重要となっていることである（写真５）。特にブタにとっては最重要の飼料である。トウモロコシや米ぬかも重要であるが，聞き取りし得た範囲では，どのサナムでもキャッサバが最重要であり，村のほぼ全世帯が栽培しているという。たしかに，当村ではキャッサバのみが植えられた畑があちらこちらに見られる[25]。ではなぜ，当村ではキャッサバが好まれるのだろうか。

その第一の理由は調理して餌とするのが簡単だからである。当村で現在栽培されているキャッサバは，それぞれヴェトナムと中国由来とされる導入品種である。ヴェトナム種はサムトン村の開村前の1970年頃に，村人の出身村ですでに栽培されていたという。中国種が導入されたのは近年のことであり，2008年頃という。近隣のモン族の村の人がルアンナムター県（第１図）から持ち帰り，それがサムトン村にも広まったのだという。現在は成長が早く収量が多い中国種を植える世帯の方が多くなっている。

これらの品種は調理の際に茹でる必要がなく，生で家畜に与えることが可能である。調理の仕方は世帯ごとに多彩であり，細かく刻む世帯もあれば，おろし金を使ってすりおろす世帯もあれば，臼と杵を使って粉砕する世帯もある[26]。しかし，いずれの場合も生で与えることには変わりない。

火をおこして茹でる過程がないことが村人にとって



写真５　キャッサバイモ（2012年12月撮影）

いかに楽と感じられているかは以下の例を見てもわかる。当村の谷沿いには野生バナナの群落がよく見られる。野生バナナは東南アジアの他地域ではブタの重要な飼料となっている[27]。ところが，この村では野性バナナの葉や偽茎を家畜の飼料とする人はほとんどいないという。これらを飼料に加工するためには茹でる必要があるが，それが面倒なためである。

キャッサバが飼料として好まれるさらなる理由として，長期間収穫せずに，畑に放っておくことができ，畑を貯蔵庫代わりに利用できることが挙げられる。当村の栽培品種は4-5月に栽培して半年間で収穫可能となるものの，それ以降も収穫せずに長期間[28]，畑に放置しておくことが可能である。しかも，当然のことながら，この間にイモはさらに肥大してくれる。このように，その時々に必要な分のみ収穫し，あとは畑に「貯蔵」しておける点もキャッサバの利点である。これに対し，ラオスでキャッサバと並んで重要な飼料であるトウモロコシはゾウムシの害にあいやすく，貯蔵が難しい。年間を通じて安定的に飼料を供給できるという点でキャッサバの利点は大きい。

さらに，米と土地利用上競合することがないという点もキャッサバが好まれる理由として重要である。村人によると，キャッサバはどちらかというとやせた砂地が最適であり，米栽培に最適な壌土ではかえって出来が悪いという。しかも，当村の焼畑稲作では基本的に1年で畑地を放棄するが，キャッサバは3年間同じ土地で栽培できる。そのため，移動回数は少なく，焼畑と土地利用上競合することはまずない。

実際には，当村のような山地村ではキャッサバ栽培に向いた土地はいくらでもあり，問題となるのはサナムとの近接性と土地利用権である。運搬の労を考えるとサナムのすぐそばにキャッサバ畑を開くのが便利である。しかし，この場合はブタの食害にあわないよう，隙間のない密な柵で畑を囲む必要がある。こうした柵作りには少なくとも2週間はかかるという。ブタの食害を考慮すると，キャッサバ畑はサナムから徒歩30分程度離れたところに作るのがよいという。この場合は，ブタがやってこないので，柵はウシ・水牛向けの間隙の多いものでもかまわない。こうした柵なら2-7日で完成するという。

キャッサバはもちろん自身の保有地に植えるのがよい。しかし実際には，ある世帯の保有地にその世帯を含む3-7世帯がまとまって栽培している場合が多い。これは共同で栽培した方が柵作りが楽になるためである[29]。例えば，2014年には，サナムJの設営世帯はサナムにいたる林道に沿って5世帯が共同でキャッサバを栽培していた。キャッサバ畑はサナムに行く途中にあり，オートバイで収穫した作物を運ぶこともできるため便利である。

年間の栽培規模は少ない世帯で2000株，多い世帯で15000株である。栽培規模は世帯のブタの飼養頭数と労働力に関係しているという。たくさんキャッサバを植えておけば，それで2-3年のブタの飼料をまかなえる。

当村では，キャッサバはブタだけでなく，ニワトリにも与えられ，トウモロコシや米[30]と並んでニワトリの重要な飼料となっている。この場合，細かく刻んだり，粉砕したりして与えられる。

（3）サナムでの家畜の世話

次に，村人がどれほどサナムに滞在し，家畜の世話を行っているのかを説明したい。後述するように，当村のサナムは家畜飼養のためだけに設けられているのではなく，焼畑繁忙期の寝泊まり小屋としての機能も果たしている。そのため，村人が最もよくサナムに宿泊するのは焼畑のシーズンである[31]。農閑期になると宿泊者は少なくなる。しかし，ブタや家禽の給餌は引き続き行わないといけないので，各世帯が朝夕にサナムにおもむき，給餌を行っている。サニアウ川沿いのサナムなどは徒歩の場合，往復2時間かかり，帰り道は厳しい上り坂となる。それでも朝夕の給餌には行かなければならない[32]。

実際には各世帯は給餌のためだけにサナムに通っている訳ではない。調査期間中の村人の行動を見ていると，サナムに行くついでにさまざまな仕事を行っていることがわかった。村人の行動を見ると，朝サナムに行って家畜の給餌を行ったあと，周辺の森林で山菜採集や小動物を対象にした罠の設置と見回り[33]，焼畑の伐採作業，ウシ・水牛の様子見に出かけている。そして，夕方サナムで再度の給餌を行ったあと，集落に帰ってくるのである。このようにみると，サナムは単に家畜飼養拠点として機能している訳ではなく，集落から離れた森林でのさまざまな活動の拠点となっているともいえる。

また，農閑期であっても各サナムには数人の宿泊者がいる。これは給餌に通うのが面倒ということもあるが，より大きな理由は家畜を守る必要があるためである。特に，ニワトリは盗まれたり，ジャコウネコに襲われたりすることが多い。実際，2012年2月の調査時には，サナムIで8羽のニワトリが1月に盗まれたと

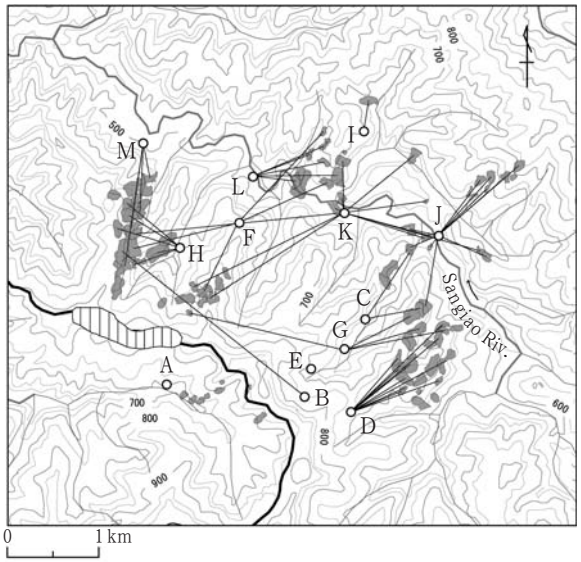
いう話を聞いた。こうしたことがないように，サナムKでは少なくとも２人がサナムに宿泊するようにしているという[34]。

Ⅳ　焼畑拠点としてのサナム

先述したとおり，当村のサナムは焼畑拠点としても機能している。つまり，農作業の繁忙期に焼畑に近接して寝泊まりするための宿泊地としても機能している。このことは農耕期間中にサナムの宿泊者は増えるという村人の言から明らかである。それでは，サナムと焼畑とは実際にどれほど近接しているのだろうか。

第４図は2012年における各サナムと設営世帯の焼畑を線で結んだものであり，第２表にはその距離を集落からの距離と比較して示した。これをみると，サナムBをのぞく全てのサナムは集落と比べて設営世帯の焼畑に近い場所に位置していることがわかる。その距離は平均して集落から通う場合と比べて，２分の１から10分の１に短縮されているのである。

また，各サナムの設営世帯の焼畑が近接する一定の場所にまとまっていることも興味深い。複数世帯が設営するサナムD，G，H，J，L，Mにおいてこの傾向



第４図　サナムと設営世帯の焼畑の距離（2012年）

Distances from each *sanam* to the fields of the *sanam* members in Samton Village（2012）

Distances are lined to the 59 fields whose owners are specified. Fields in 2012 was surveyed by Vienkham DAFO staff using GPS.

が顕著である。このことから，サナムを同じくする世帯は村内の同じ地域に土地を保有する集団であるということができる。

年ごとの耕作地の移動にあわせて，サナム間を移動する世帯もある。Ｐ氏は2012年にはサナムＭに小屋を建て，近くの２枚の土地を耕していた。彼はこのサナムの周辺に３枚の土地を保有しており，例年はこのサナムに小屋を建てている。ところが，彼の土地のうち１枚はこのサナムからかなり遠い。2013年には彼はこの土地を耕すことに決め，2012年12月にそれに近接したサナムＫに小屋を移した。2014年にはサナムＭにまた帰ってくるという。焼畑地の移動にあわせてサナムを移動するというこの例をみると，サナムが焼畑に近接する宿泊地としての機能を果たしていることがよくわかる[35]。

Ⅴ　考　　察

ここではサナムの役割とその将来性について，考察しておきたい。筆者は以前，ルアンパバーン県シェンヌン郡フアイペーン村を事例として，家畜飼養を目的に設置されたサナムについて紹介したことがある。この場合，サナムは飼料であるトウモロコシの栽培適地に近接して設けられ，焼畑稲作とは立地上の関わりを持たなかった。これに対し，本稿の事例では，サナムは焼畑地に近接して設けられている。こうした事例の場合，サナムは焼畑を第一に考えて設置されたものであると考えてしまいがちである。しかし，そこには注意が必要である。

筆者は本稿の事例でも，サナムは明らかに家畜飼養を目的に設置されたものであると考えている。焼畑への近接は副次的な意味合いしかない。なぜなら，サナム設営のきっかけ自体が政府の政策や伝染病の流行により，集落での家畜の放し飼いが不可能になったことにあるからである。また，焼畑への近接が第一の目的なら，焼畑に設置されている畑小屋に宿泊することも可能なはずである。実際，ラオスの山地民は古くから農繁期は畑小屋に宿泊するのが常であったし[36]，今もそうした事例は見かけるのである。さらに，獣害対策を考えた場合，畑小屋に泊まらないと意味がない。

フアイペーン村の事例と違って，本稿の事例でサナムが焼畑に近接して設けられているのは飼料の違いが大きい。サムトン村のブタの飼料であるキャッサバは，フアイペーン村で栽培されていたトウモロコシの在来品種ほどには土地を選ばない。村内ではほとんどどこ

でも栽培できるのである。したがって，当村で家畜飼養拠点を設けようとした場合，それは飼料畑の位置に規定されない。そこで，村人は村内で最も自分がよく通う場所である焼畑の周辺に家畜飼養の拠点を設置することになる。これがサナムである。とはいえ，焼畑の中にはサナムは設置できない。家畜による食害の問題がシビアになるし，家畜に与えるだけの十分な水がないためである。そこで，焼畑に近接した沢沿いの平地にサナムが設けられることになる。それは焼畑の繁忙期の宿泊地としても利用されるし，その周辺で行われる狩猟や採集の道具の置き場にもなる。

複数世帯の設営が多いのは，森林の中に一世帯のみ設営するのは心細いためである。家畜の見張りや世話を考えたときも，数世帯での助け合いが必要になる。宿泊も交代で行える。そこで，親戚同士などが共同で設営する例が多く見られるようになる。

以上のように，当村のサナムは家畜飼養の拠点として形成されたものということができる。それでは，サナムは今後ともこうした機能を果たしていくのだろうか。本稿で見たように，当村のサナムもここ数年は伝染病の流行が頻繁に見られる。林道の開通により，サナムと集落のアクセスは高まりつつあり，この傾向はさらに進んでいくだろう。それでも，村人の多くは病気が流行しても「集落では家畜が全部死んでしまうが，サナムでは少しは生き残る」という。あるいは，病気を徹底して避けるために，さらに奥地にサナムを移動させる村人もいる。とはいえ，現在の状況を見る限り，病気回避の面におけるサナムの有効性は大きく後退しているといえよう。

こうした状況においては，すでに獣医学の多くの研究が指摘するように，家畜のワクチン接種をきちんと行う必要がある。ワクチン接種により，家畜伝染病の多くは予防できるのである。問題はサムトン村のような隔絶山村にまでワクチンを十分に配布できるようなシステムの開発にある。ラオス政府や国際機関はこの点に十分に意を注ぐべきである。

それでは，病気回避の効果が薄くなった当村のサナムは今後家畜飼養の場として機能しなくなっていくのだろうか。筆者はその可能性は低いと考えている。病気回避の効果が減少しても，放し飼いの場としてのサナムの意義はあり続けるためである。村人の放し飼いへのこだわりは強い。焼畑シーズンも含めて一年中，ブタの放し飼いをしようとする村人もいる。そのために近辺の焼畑を堅牢な柵で囲う作業を２週間もかけて行うのである。たしかに，朝夕サナムまで餌やりに行くのは大変な労力といえる。しかし，林道の建設後オートバイでサナムに行く世帯も増えており，その労力も軽減されつつある。

タイ北部のモン族のブタ飼養を研究する中井は，調査村では集落近辺での舎飼いが普通になっているという。ところが，それでも時にブタが放し飼いにされているのを見かけるという[37]。ラオスよりもいろんな点で生活の現代化が進んだといえるタイでもこうした状況である。東南アジアの山地民の放し飼いへの欲求の強さがうかがえる。幹線道路沿いのサムトン村では，集落での放し飼いは不可能である。それゆえ，放し飼いの場としてのサナムの意義は今後とも続くと思われる。

Ⅵ　おわりに

本稿はサムトン村のサナムの役割について，筆者の以前調査したフアイペーン村の事例と比較しつつ検討した。その結果，当村でも病気を避けつつ放し飼いをするという家畜飼養の目的がサナム設営のきっかけとなっていること，当村では家畜のメインの飼料がキャッサバであるため，サナムの立地が飼料の栽培適地に規定されず，サナムは焼畑の近接地が選定されるに至ったこと，病気を避けるというサナムの役割は近年減退しつつあるが，放し飼いの場という役割は健在なことが明らかになった。

本研究から，東南アジア山地民の放し飼いへの欲求の強さが改めて浮き彫りになった。このこと自体はこれまでよく指摘されてきたことである。しかし，放し飼いがどのような意義を持つのかは十分に検討されていないのではないだろうか。放し飼いが省力的な家畜飼養を可能にするという指摘はよくなされる。たしかに，山地民は焼畑をはじめ，多様な仕事に従事しており，これが必要なことは理解できる。しかし，理由はそれだけだろうか。放し飼いの意義を村人の生計上の問題，宗教も含めた文化的な問題，家畜の健康，生産性，肉質などを含めた畜産学的な問題など，多面的な立場からに検討する必要がある。

これまでラオスの畜産研究では，ワクチン接種や外来飼料の導入，舎飼いによる集約的飼養など，外来の近代技術をいかにラオスに適用するかということが議論されてきた。しかし，本稿で見たように，放し飼いをはじめとする在来型の飼養技術への村人の執着は根強いものがある。そこには何らかの意義があるのかもしれない。その意義を学際的な立場から明らかにして

いくことが今後の課題といえよう。

［付記］ 本稿作成のための現地調査にあたっては，サムトン村の方々，ウィエンカム郡農林局の方々，ラオス国立大学林学部の先生方にご協力いただいた。この場を借りて厚くお礼申し上げる。なお，本研究には，科学研究費補助金基盤研究（A）「東南アジア大陸山地林の攪乱動態と山地民の環境保全」（課題番号21255003）の一部を使用した。また，本稿の骨子は2014年３月に京都大学で開催された国際会議，“Sustainable Forest Management and Indigenous Uses of Forest Resources in Myanmar”で発表した。

注

1）Wilson, R., ‘Status and prospects for livestock production in the Lao People’s Democratic Republic’, *Tropical Animal Health and Production* 39, 2007, pp. 443-452.

2）前掲 1）。

3）Conlan, J., Khounsy, S., Phithakhep, L., Phruaravanh, M., Soukvilai, V., Colling, A., Wilks, C. and Gleeson, L., ‘Pig production and health in Bolikhamxay province, Lao PDR’,（Conlan, J., Blacksell, S., Morrissy, C. and Colling, A. ed., *Management of classical swine fever and foot-and-mouth disease in Lao PDR,* ACIAR, 2008）, pp. 28-33.

4）（1）Roder, W., ‘Slash-and-burn rice systems in transition: challenges for agricultural development in the hills of Northern Laos’, *Mountain Research and Development* 17, 1997, pp. 1-10.（2）中辻享「ラオス焼畑山村における農村開発政策の意義と問題点―ルアンパバーン県シェンヌン郡の高地村落と低地村落の比較から―」地理科学65，2010，26-49頁。

5）Millar, J. and Photakoun, V., ‘Livestock development and poverty alleviation: revolution or evolution for upland livelihoods in Lao PDR?’, *International Journal of Agricultural Sustainability* 6, 2008, pp. 89-102.

6）Bouahom, B., ‘Prospects for livestock in upland Lao PDR farming systems’,（Chapman, E. C., Bouahom, B., and Hansen, P. K. ed. *Upland farming systems in the Lao PDR: Problems and Opportunities for Livestock,* ACIAR, 1998）, p. 109.

7）（1）Blacksell, S., Khounsy, S., Boyle, D., Greiser-Wilke, I., Gleeson, L., Westbury, H. and Mackenzie, J., ‘Phylogenetic analysis of the E2 gene of classical swine fever viruses from Lao PDR’, *Virus Research* 104, 2004, pp. 87-92.（2）Conlan, J., Blacksell, S., Morrissy, C. and Colling, A. ed., *Management of classical swine fever and foot-and-mouth disease in Lao PDR,* ACIAR, 2008.（3）Nampanya, S., Rast, L., Khounsy, S. and Windsor, P., ‘Assessment of farmer knowledge of large ruminant health and production in developing village-level biosecurity in northern Lao PDR’, *Transboundary and Emerging Diseases* 57, 2010, pp. 420-429.（4）Nampanya, S., Richards, J., Khounsy, S., Inthavong, P., Yang, M., Rast, L. and Windsor, P., ‘Investigation of foot and mouth disease hotspots in northern Lao PDR’, *Transboundary and Emerging Diseases* 60, 2013, pp. 315-329.（5）Nampanya, S., Khounsy, S., Rast, L., Young, J., Bush, R. and Windsor, P., ‘Progressing smallholder large-ruminant productivity to reduce rural poverty and address food security in upland northern Lao PDR’, *Animal Production Science* 54, 2014, pp. 899-907.（6）Nampanya, S., Khounsy, S., Rast, L. and Windsor, P., ‘Promoting transboundary animal disease risk management via a multiple health and husbandry intervention strategies in upland Lao PDR’, *Tropical Animal Health Production* 46, 2014, pp. 439-446.（7）Millar, J., ‘The role of livestock in changing upland livelihoods in northern Lao PDR: facilitating farmer learning according to ethnicity and gender’, *Journal of Mekong Societies* 7-1, 2011, pp. 55-71.

8）前掲 3）。

9）前掲 3）。

10）前掲 7）（5）

11）中辻享「ラオス山村における出作り集落と家畜飼養」（横山智編『資源と生業の地理学』海青社，2013），217-241頁。

12）この５ヵ村はサムトン村南方の現在のウィエンカム郡サンガーン区，プーサナム区にあった村のようである。これらの村の住民が移住した理由は彼らの母村では1975年のラオス人民民主共和国の成立以降も，まだ王党派の軍隊によるゲリラ的活動が続いていたためだという。

13）また，自家用車を持つ世帯は３世帯であった。

14）豚コレラの頻発するボリカムサイ県の諸村では，村人は感染を恐れるあまり，ブタは生後３ヶ月以内に販売してしまうという。当村でも同様の理由があるのかもしれない。前掲 3）。

15）2014年９月の副村長への聞き取りによると，村でサナムを設営していないのは８世帯ということであった。この場合，88％の世帯が設営していることになり，その数は増加したということになる。

16）各世帯が慣習的に利用してきたため，優先的利用権を有する土地のことである。ラオスでは全ての土地は国家に帰属し，個人は土地の利用権を持つにすぎない。したがって，ここでは「所有」という言葉は使わず，「保有」という言葉にとどめることにする。

17）Ｖ氏の小屋の付近にはなかったが，サナムには普通，サナムで食べる米を精米するための足踏み精米機がおかれている。

18）調査時期の2014年９月には，Ｖ氏はニワトリは集落で飼っていたようである。サナムでは全く見かけなかった。

19）現在もラオス政府は幹線道路沿いでの家畜の放し飼いを禁じている。そのため，幹線道路で家畜が車に衝突し，車に損傷が生じたり，乗員が死傷したりした場

合は，その家畜の所有者に弁償責任が課されることになる。これにより家畜が死んだとしても，運転手の弁償責任は生じない。なお，サナムの設置を政府が勧めたことはこれまで一度もなく，これは村人自身の実践である。

20）サナムBは1世帯のみのサナムであり，ブタの飼養頭数も少ない。ここの雄ブタは近隣のサナムまで雌ブタを探しにいくということであった。

21）口蹄疫によるウシや水牛の病死はほとんどなかったようである。口蹄疫は重篤化する前に治療すれば病死することはないという。村人は身近にある樹木の樹皮と果実を一緒に煮込んで薬を作り，患部に塗布してやるという治療法を実践している。また，当村では10年以上前からウイルス性出血性敗血症がウシや水牛の間で流行するようになった。これに対し，村人は現在，半年ごとにワクチン接種をして予防している。

22）これは彼の保有地である。サナムの場所を選ぶ際に，ここでも土地利用権が重要条件となっていることがわかる。

23）これは成鳥のみの数字である。

24）伝染病の回避と放し飼いへのこだわりに加えて，筆者は水の得やすさということも，村人がサナムで家畜飼養を続ける要因であると考えている。家畜飼養のためには水が欠かせない。しかし，尾根上の集落では共用水道の水がたびたび枯れてしまうという。

25）当村でキャッサバを畑に大量に栽培するようになったのは1990年代の中頃からという。この頃から当村でブタ飼養が活発になったと推測される。これは先述したサナム設営の始まりの時期とも重なっており，興味深い。

26）刻まれたり，粉砕されたキャッサバは米ぬかや米のとぎ汁と混ぜて家畜に与えられる。

27）Nakai, S., ‘Decision-making on the use of diverse combinations of agricultural products and natural plants in pig feed: a case study of native pig smallholder in northern Thailand’, *Tropical Animal Health and Production* 40, 2008, pp. 201-208.

28）聞き取りによると，ヴェトナム種は5-6年，中国種は2-3年収穫せずに畑に放置できるということである。

29）この場合，土地保有世帯がそれ以外の世帯に借地料を課すことはない。先述したとおり，キャッサバの連作期間は3年までであり，それ以降は畑地を移動させる必要がある。その場合は自身が他世帯の土地を借りる可能性があるためである。

30）ある村人はニワトリの成鳥に対しては籾米を，ひよこに対しては破砕米を与えると言っていた。

31）特に，6-8月は村内の小学校が休みとなるので，小学校に通う子供のために集落にとどまる必要もなくなる。したがって，小学生がいる世帯の場合は，この期間によくサナムに滞在するという。ただし，サニアウ川沿いでは8-10月は蚊が多くなるので，宿泊しにくくなるという。

32）当村では家畜への給餌を他人任せにするのは恥ずかしいことと考えられている。したがって，給餌は原則的に各世帯でなされている。同じサナムに所属する世帯同士であっても，家畜の給餌に関する助け合いはめったにしないという。ただし，村での集会に出なければならないとか，病気の場合など，どうしようもない時は，他の設営世帯に給餌を頼むことができる。

33）具体的にはサナムを拠点にラタンの若芽採集（2012年12月），小動物用の罠の設置（2012年12月，2014年9月），タケネズミ捕り（2014年9月）をする村人を見かけることができた。サナムの周辺には焼畑もあり，さまざまな作物が栽培されている。そのため，村人はサナムでは集落と違って「食べ物探しに困らない」という。

34）こうした問題から2014年9月の調査時にはニワトリを集落で飼う世帯が多くなっていた。また，盗んだ家畜を販売する例もあるため，村ではブタとニワトリに関しては，サナムか集落でしか売り買いをしてはいけないと決めている。衆人環視のもとではそういったことはできないためである。

35）サナムCとサナムIは1世帯のみの設営であるが，彼らは自身の保有する土地に建てている。また，その他の保有地も全てサナムに近接しているという。これも耕作地への近接を考慮してサナムを建てていることが明らかである。

36）1930年代後半にラオス北西部の焼畑村落で定住調査を行ったイジコウィッツは，農繁期に村のほとんどの世帯が集落から畑小屋に生活拠点を移すことを記している。また，インドネシアの焼畑村落でもこうした事例は報告されている。（1）Izikowitz, K. G., *Lamet: hill peasants in French Indochina,* AMS Press, 1979, originally published in 1951 by Etnografiska museet, Gothenburg as no. 17 of Etnografiska studier, pp. 166-167, 216.（2）Dove, M. R., ‘The ecology of intoxication among the Kantu’ of West Kalimantan’, (Dove, M. R. ed. *The real and imagined role of culture and development,* University of Hawaii Press, 1988), p. 158.

37）Nakai, S., ‘Pig domestication process: an analysis of varieties of household pig reproduction control in a hillside village in Northern Thailand’, *Human Ecology* 40, 2012, pp. 145-152.